

御曹司は契約妻を
甘く捕らえて離さない

神城 葵

Aoi Kamiobiro



Eternity
BUNKO

目次

御曹司は契約妻を甘く捕らえて離さない

5

書き下ろし番外編

君を選んだ、その先で

333

御曹司は契約妻を甘く捕らえて離さない

プロローグ

六月、ジューンブライド。花嫁の季節。

梅雨の合間に晴れた今日、私は結婚する。

相手は一ノ瀬グループの御曹司、一ノ瀬楓^{かえで}。二十七歳。俗に言う玉の輿だと思う。

けれど私は彼に恋い焦がれていたわけでもなく、かといって嫌い抜いているわけでもない。彼の事情で契約結婚を申し込まれ、お金が必要だった私が受け入れた、ただそれだけの関係。

新婦控え室では、両親と姉が泣いている。もしかしたら、愛のない結婚だと気づかれ
ているかもしれない。

それは、娘や妹が嫁ぐ喜びではなく、申し訳ないという類^{たぐい}のものだったから——私は、
挙式当日の花嫁らしくない溜息を零した。

『時間もつたない。はっきり言えば、俺と契約してほしい』
求愛とは程遠いそんな言葉を受けて、私は彼と契約結婚をするのだから。

不意に重ねられた唇を、黙って受け入れた。そのまま抱き上げられ、ベッドに運ばれる。
「ん……」

キスが深くなり、舌を絡め取られた。

濡れた音がして、楓さんの舌が口内を撫でる。ぞく、と肌が粟立って——それが快
感なのだと知った。

キスを繰り返しながら、唇に指が押し当てられた。ゆるりと撫でられた時、声が零れた。
「ふ……っあ……」

「くすぐりたい?」

唇に触れられているだけなのに、全身が震える。唇を撫でていた指が、そっと口内に
押し入ってきた。

「ん……っふ、あ……」

啞えさせられた指に、思わず舌を這わせる。節のない指を舐めると、楓さんの瞳孔が
猫のように細められた。

バスローブはだけられ、乳房を揉まれる。少し痛いぐらいの刺激に思わず声を上げ

ると、楓さんが耳に噛みついてきた。

「っ、ん……………」

耳に愛撫される度、体が震える。気持ちよくてほうつとなつた私を、楓さんがくすぐるように呼んだ。

「桃香」

またキスが降りてきて、同時に乳房が包まれる。大きな手が乳房を揉み、そこから湧く快感に喉を反らすと、首筋に口づけられる。

首、鎖骨、乳房にキスされ、乳首を指先で捏ねられた。

「っあ、……………あ……………」

零れる声を抑えようと、口元を手で覆う。それでも、声は殺しきれない。

乳首の一方を指で、もう一方を唇で責められ、私は突き抜けるような快感に体を振った。

「あ、ん……………っあ、あ……………」

吸われたり、指で押される度、乳首の感度が上がっていくのがわかる。もう、彼の吐息だけで震えそうだった。

「ん……………っ、あ、っあ……………」

乳房が解放され、バスローブを脱がされた。下着越しに秘部に指を添えられる。恥ずかしさに、手で顔を覆った。

するすると撫でられ、ショーツを剥ぎ取られる。剥き出しになった場所に、さつきまで私が唾えていた指が触れた。

「ん……………っ」

声は抑えきれなくても、せめて顔は隠したい。楓さんの指が、少し乱暴に秘部を騷る。くちゅりと濡れた音を立てて、指が差し込まれた。

「……………っ！」

違和感と異物感に、悲鳴を堪えた。痛みはそれほどではないけれど、圧迫感が強い。

「痛いかな？」

少しだけ申し訳なさそうな楓さんの問いに、私は首を横に振った。だって、これは仕方のない痛みだ。私が初めてなのは——処女なのは、楓さんのせいじゃない。

そう達観したいのに、もう一本指が押し込まれ、思ってもいなかった痛みに思わず息を呑んだ。

「……………っ、あ……………っ」

私の体は、押し入ってくる異物に抗うように震えている。この先が怖くて息を殺した時、楓さんが乳房に吸いついた。

「あ……………」

突然のことについていけない私の隙をつくように、差し込まれていた指がぐるりと回

転する。

「あつ、ん……っ！」

思わず眉を蹙めたけれど、楓さんは構わず行為を続けた。違和感が強くなった時、不意に下肢に熱い息がかかった。——私の体の中心に、楓さんが顔を埋めている。

羞恥に耐えかねて脚を閉じようとした時、一番弱いところを愛撫された。

「あ、っあ……っん、あ……っ！」

全身が、大きく震える。楓さんが吸いついたり歯を立てたりする度、胎内がどくりと脈打つのがわかった。

狭い腔で指が蠢き、押し広げながら弱い部分を擦る。今まで知らなかった快感に、私は息をするのが精一杯だった。

「っん、あ……っつふ……っつ、あ……っ！」

両手の下に隠した顔が熱い。痛いのか気持ちいいのか、それもわからない。ただ、楓さんの指と舌に翻弄されている。

不意に指が引き抜かれた後、腰を抱かれる。熱くて硬いものが、私の中心に宛がわれた。それが何かは、知識としてだけ知っている。

「……っ」

怖くて震えそうになった時、ソレが私の中に挿入ってきた。

さつきまでとは比較にならない異物感と痛みに耐えかねた時、やわらかくキスされた。下半身を意識から切り離したくて、私は楓さんのキスに溺れた。口内を颯る舌に夢中になっていたら、体を引き裂くような痛みが襲った。

「っん……、ん、……っ！」

痛い。痛くて、熱くて、引き裂かれそう。早く終わってほしい。涙が零れ落ちたのを感じた時、楓さんが囁いた。

「痛むだろうが、我慢してくれ」

キスの合間に告げられた我儘に、私は何と答えればいいのかわからない。痛いの、早く終わってほしいのに——逆らえない。

私をじっと見つめて、楓さんがゆっくり動き始めた。思わず、眉を蹙める。

「っ、……ん……っ、あ……っ！」

痛みと異物感、それから——侵入されている違和感。同時に、ほんの少しだけ、快感が走る。

その快感だけを追おうとした時、体が反転させられた。

「いた……い……っ」

思わず悲鳴を零したけれど、楓さんは背中に口づけながら律動を始めた。——仕方ない、だってそうしないと終わらないことだもの。

わかつているのに、涙が零れるのはどうしてだろう。引き裂くような痛みも、灼けるような熱さも、今更なのに。

「っん、あ、ん……っ！」

耳に残る自分の声は、他人のもののように聞こえた。実際、こんなに痛いのに喘ぐなんて、他人だとは思えない。

「あ……っあ、ん……！」

強い痛みと、僅かな快感——どちらも厭わしくて、早く終わってほしいと泣きながら、私は最悪の初夜を過ごした。

1. 彼の提案

私、眞宮桃香の家は、そこそこの規模の不動産会社を経営している。が、父が内部留保より規模拡大に注力した結果、現状は不景気の煽りを受けて倒産寸前だ。

以来、二十四歳の私と二つ上の姉に持ち込まれるお見合い話は、それなりの結納金を用意してくれる相手ばかりになったけれど、正直、結納金程度では焼け石に水だった。何せ、父の負債は十億円以上になるのだから。

そんな時、旧財閥系の一ノ瀬グループ御曹司からお見合いの申し入れがあった。姉ではなく私を名指したことに疑問はあるものの、相手は今までにない資産家だ。条件として実家を救ってくれるなら、どんな相手とでも結婚するつもりだった。

桜が美しい盛りの春の日曜日。吉日を選んで、お見合いの席が設けられた。とはいえ、仲人は不在の簡素なものだ。

私は祖母からもらい受けた薄桃色の振袖を着て、美しい桜並木の道をタクシーで通り抜ける。お見合いの経験は何度かあるけれど、その度に緊張する。

そうして赴いたお見合いの席——都内でも屈指のラグジュアリーホテルのラウンジに着いた私は、事前の打ち合わせの通り、ウェイターに待ち合わせである旨を告げた。

上質な調度品を飾るように花々が生けられ、ふかふかの絨毯を敷きつめたラウンジの奥に、待たせ人がいた。

その人は、呆れるほど容姿端麗な男性だった。私が近づくと、すっと立ち上がる。物憂げな表情がよく似合う美貌と、ダークグレーのビスポークスーツ越しでもわかる引き締まった長身の、モデルのような体型。身につけているものは明らかに一流の品ばかりだった。

これは、私の方こそお断りされても仕方ないと思った。私も振袖で正装してきたけれど、明らかに相手の方が華やかだ。

「一ノ瀬楓です」

一ノ瀬楓——一ノ瀬さんは、声も良い。低すぎないバリトンの声は艶やかで、年相応に若く張りがある。

「眞宮桃香です」

このお見合いが仲人を立ててのものではなく、本人のみの顔合わせという形を取っているのは一ノ瀬さんからの要望だ。理由はわからない。

一ノ瀬さんが肘掛け付きの椅子に座り、私はソファに腰を下ろす。帯を崩さないように姿勢を保つのは、バレエを習っていたおかげで体幹が鍛えられているので問題ない。

「早速ですが、私はこの話を進めたいと思っています」

前置きなしの一ノ瀬さんの言葉に、私は手にしたコーヒークップを落としそうになる。今まで経験したお見合いでは、一応、相手を知ろうとする努力の会話があったはずなんだけど。

「進めたい、とは……?」

「結婚したいという意味です」

その言葉には何の熱もなく、間違っても「まさかこの美形御曹司が私に一目惚れ!」とはならないくらい平坦で冷たい。

「その、釣書は拝見しましたが……いきなり結婚と言われても」

「見合いというのは、結婚を前提にしたものでは?」

冷静に言われて、私は言葉を探した。正論には正論で返すしかない。

「会ってすぐに、何の会話もなく『この話を進めたい』というのは、何かあるんだと思わせるには十分ですが」

私の答えに、一ノ瀬さんは小さく首を傾げた。

「桃香さんは、結婚する気がないのに見合い話を受けたと?」

「そうではなくて!」

思わず強い口調になった私に、一ノ瀬さんはふう、と溜息をついて——態度を一変させた。

「時間がもったいない。はっきり言えば、俺と契約してほしい」

「契約?」

「君の父上の負債の肩代わりと、会社を再建するのに必要な資金を提供する。貸すわけじゃないから返済はいらない」

法的な問題はこちらの弁護士と相談して対処する、と一ノ瀬さんは続けた。この傲岸不遜さを、一瞬でも隠せていたのはすごいと思った。

「その代わり、君は俺の妻として振る舞って、子どもを産んでほしい」
咳き込みそうになった私を咎める人はいないだろう。

「子ども」

「できれば二人以上。性別は問わない。出産後は俺もサポートするが、子どもたちがあがる程度の年齢になるまでは母親として接してほしい。その後なら離婚に応じる。さつき言った結婚の条件とは別に、普通の離婚として財産分与するし慰謝料も払う」

淡々と説明し、一ノ瀬さんはコーヒーを飲んだ。カップを持つ手つきも優雅そのものだ。あまりに突拍子もない要求を受けると、人は冷静になれるらしい。私は、妙に落ち着いてたまま、一ノ瀬さんの提案について思考を巡らせた。

父の負債を肩代わりしてくれる——これは私が結婚において最優先の条件として考えていたことだ。正しくは援助してもらえればという程度で、丸ごと肩代わりは想定外だけど、ありがたいのも事実。ロマンティストな姉の梨香りかがそんな結婚は嫌だと主張していたから、私がどうにかしなければと思っていた。

更に、事業再建までの資金援助。願ってもない申し出である。

対価は、私の人生。子どもを二人産んで、ある程度の年齢になるまで育児して、その間は一ノ瀬さんの妻として振る舞う——ざっと計算して二十年から三十年というところだろうか。

「……こちらへの条件が良すぎるんですが。約二十年、あなたの妻として振る舞って子どもを育てる、それへの対価が十億円以上って……」

私の疑心暗鬼な問いに、一ノ瀬さんは不思議そうな表情を返してきた。

「君は二十四歳だったか。女盛りを支払ってもらうには、この条件は必要な対価だと思う」

そっとコーヒーカップをソーサーに戻し、一ノ瀬さんは真顔で言った。

「妻として振る舞うだけでなく、出産と育児も要求している。きちんとした対価を払わないと申し訳ない」

確かに、妻として振る舞うだけでなく出産も必要となると、さつきの条件は妥当なのだろうか。残念ながら、契約結婚の相場なんてものは知らない。

「……」

私が思案していると、一ノ瀬さんは答えを迫ってきた。

「今この場で返事が欲しい。俺の方も都合があって、君が駄目なら他の女性を当たらないければならないから」

ここでの会話の口止め料は払うと続けた彼に、本当にこれは契約結婚の申し入れなんだと実感した。

「私、箱入り奥さまにはなりたくないのですが」

「そのことなら、君の経歴を見た。今の職場は退職してもらって、俺の第二秘書に思っている」

「一ノ瀬グループの次期社長の秘書ですか……」

務まるだろうかと思つた私に、一ノ瀬さんは説明を続けた。
 「事業の進捗やビジネスに関することは第一秘書の月足つきたりがいるから、君に頼むのはそう面倒なものにはならないと思う。一応、秘書という役職になる、という程度に思つてくれればいい」

妻同様、お飾りということだ。そこまで言つて、一ノ瀬さんは私を見つめた。綺麗な漆黒の瞳が映える美貌は、神秘的で幻想的だ。

「わかりました。お受けします。ですが」

私からも、融資以外に条件がある。それほど無理なものではない、とは思うけど。

「契約結婚であることは、私の家族には言わないでください」

「もちろん。俺の家族にも言うつもりはない。——じゃあ、契約に移ろうか」

一ノ瀬さんが立ち上がったので、私も席を立つ。そのままラウンジを抜け、受付の前も素通りして、一ノ瀬さんはエレベータの前で歩みを止めた。

「あの……?」

流れでついてきてしまったが、どこに行くのか。

「あそこで契約を交わすわけにはいかなからな。部屋を取つてある。そこで書面を見てサインしてほしい。判子がないなら、とりあえずは拇印でかまわない」

「実印は持ち歩いています」

バッグの中の、更にポーチの底に入れてあるので、紛失の可能性は低い。ただしバッグを落としたらそれまでなので、持ち歩きには注意している。

「不用心じゃないのか」

「実家に泥棒が入ったことがあるもので」

私の答えに、一ノ瀬さんは眉を擡めた。綺麗な顔立ちだから、そんな表情も絵になる美しさだ。

「防犯セキュリティは?」

「簡易なものだったのです。今はそれなりのものに変えています」

私がそう答えた時、エレベータが開いた。一ノ瀬さんがカードキーをかざすと、最上階の数字が点灯する。

「君は、見合いとして家を出てきたんだな?」

「はい」

「なら、あまり遅くならないようにする。重要なものだけ確認して、細かいところすり合わせはまた後日に」

「わかりました」

頷いた私に、一ノ瀬さんは満足そうに笑つた。「感情の機微に疎い」と家族に評されている私でも一瞬ドキツとしたくらい、綺麗で邪気のない微笑みだった。

スイートルームの中でも特に高級だろう部屋に着き、一ノ瀬さんが扉を開ける。ホワイエを通り抜けた先に、リビングスペースがあった。

ゆったりとした造りのソファに座った一ノ瀬さんが、向かいの席を勧めてくれたので私も腰かける。ここでも帯を保護、姿勢維持は崩せない。

「契約書の雛形だ」

そう言って一ノ瀬さんが見せてくれたのは、本当に契約書だった。

大雑把な婚姻期間、子ども、財産分与その他。結婚に伴い、私を受ける資金援助と負債の肩代わり。それらが一つひとつ丁寧に説明されている。

「子どもについては、もし私か一ノ瀬さんのどちらか、あるいは双方が不妊症だったらどうなりますか？」

「そうか。その可能性があったな。……ブライダルチェックを受けて、不妊症だとわかった場合は子どもは無理強いしない。ただし、うちの親が子どもを諦めてくれるまでは夫婦として過ごしてほしい」

私の指摘にそう答えると、一ノ瀬さんが立ち上がる。どうしたのかと見つめていたら、室内のミニキッチンで紅茶を淹れてくれた。

「すみません、気が利かず」

「振袖で茶を淹れるなんて技術は、茶道の時だけでいいだろう」

その話し方から、私が茶道華道香道を習っていることを彼は把握しているようだ。釣書にきちんと目を通していいらしい。

「契約について質問してもいいですか？」

一ノ瀬さんがソファに座ったタイミングで、私は質問することにした。受けるつもりで契約とはいえ、気になることは多々ある。

「どうぞ」

「どうして、十億円以上も払って私と結婚を？」

あまりにも契約の準備が整いすぎている。私の問いに、一ノ瀬さんは気怠げに首を傾げた。

「そろそろ、財産目当てで寄ってくる女が鬱陶しい」

「はあ」

財産目当てじゃなく、一ノ瀬さん自身を好きな人もいるんじゃないかな。それほど綺麗な人だ。

「親もうるさいし、結婚して身を固めるしかないと思った。が、適当な人材がない」
女性ではなく人材と言う辺り、とことんビジネスライクな人だと思っ。

「別に結婚後に女遊びするつもりはないが、束縛されるのも好きじゃない。でも子ども

は欲しい。そんな俺の自己中心な事情に付き合ってくれる人材となると、な」
 白磁のティーカップに口をつけてそう言うと、一ノ瀬さんは長い脚を組んだ。いわゆる俺様座りが、この上なく様になっている。

「ある程度、金で動いてくれる人材がいい。加えて、当人にも特技が欲しい」

「お金の面はわかりませんが」

「何せ十億円の負債だ。これを肩代わりしてもらおう恩は計り知れない。」

「私には特技というほどのものはありませんが」

「見合いの釣書を見ていたら、君の『趣味』にはフランス語とスペイン語とあった。どの程度話せる？」

「フランス語は、ビジネス文書くらいでしょうか。専門書は辞書が必要です。スペイン語は日常会話なら何とか」

私はフランス古典が読みたくて勉強した結果、その分野なら辞書なしで読み書きできる。短期だけどフランスに留学もしたので会話はできるものの、経済学の専門書は難しい。スペイン語に至っては、バスク地方で必要に応じて覚えた程度だ。

「十分だ」

聞いて、一ノ瀬さんは言葉が続けた。

「レセプションやパーティーでは、フランス語が重宝される。俺だけじゃなく、妻も話

せるに越したことはない」

優雅な所作で紅茶を飲み、一ノ瀬さんは私を見つめた。正面、横顔、どの角度から見ても非の打ち所のない美形で羨ましい。

「つまり、ある程度はお金で動かせて、且つあなたの邪魔にならない程度の妻が欲しいと」
 「そういうことだ」

一ノ瀬さんは、理解が早くて助かると言った。

「私もお金目当てで結婚しますが、一ノ瀬さんも」

「楓でいい」

「……楓さんも、私の邪魔にはならないようにしてくれて、ということでもいいですか」

「邪魔？ 俺が？」

「ええ。私、あなたの第二秘書になるんでしょう？ 仕事に家庭の事情を持ち込まれたくないので」

例えば喧嘩した時、それを職場でまで引きずられても困る。そこは私も気をつけないといけないけど。

「お互いの利益を考えての契約ですよね？ 私、負債を肩代わりしてもらおう恩はありませんが、それは結婚生活で返済するつもりです。それから、子ども……お金の為に子どもを産むというのは私の倫理観に反するので、積極的な妊活はしたくありません」

さつきは、あまりの好条件に一も二もなく頷いてしまったけど。お金の為に子どもを産むのは、何だか人身売買のようで嫌だ。「必要だから産む」というのもわからなくはないけれど、私が私の意思で契約結婚するからといって、生まれてくる子どもに迷惑をかけたくない。

……まあ、お金の為に結婚するのも大概ではある。

「わかった。子どもについては授かりものとして除外しよう。ただ、授かった場合は子どもが独り立ちできるまで『親』として育てたい。婚姻期間をその分延長できるか？」
「わかりました」

私の希望を汲んでくれた楓さんに感謝する。こちらの希望も聞き入れてくれるなら、先にはつきり言っておいた方がいいので、私はもう一つの懸念を伝えることにした。

「それと、性行為ですが。子どもを授かる為にも拒否はしませんか？」

「そうしてくれると助か——」

「私は未経験なので、そこを考慮していただけると嬉しいです。プライダルチェックは、エコーや血液検査なら受けますが、内診はちょっと遠慮したいというのが本音です」

「……つまり、処女？」

私のあけすけな表現に数秒沈黙した後、楓さんが確かめるように訊いてきた。

「はい」

「……そうか」

ソファに背を預けるように深く座り直して、楓さんは髪をくしゃりとかき混ぜた。困惑しているらしいことは、何となく窺えた。

「すみません、お手数おかけします」

私が謝ると、楓さんは微妙な顔になった。

「いや……謝られることでもない」

確かに、契約結婚の相手としては、異性関係が派手よりはマシなのかもしれない。

私が一人で納得したところで楓さんも動揺を落ち着かせたらしく、連絡先の交換になった。アプリを起動してIDを交換し、携帯番号も登録する。ついでにメールアドレスも教えて、さつき見せてもらった契約書の雛形の送付を依頼した。

「この契約については口外無用なのはわかりますが、お互いの家族にも秘密でしたよね？ 今日のお見合いで突然結婚が決まったとなると、それなりの理由がないと苦しいです」

「ああ。俺が君の経歴を気に入っての見合いで、会ったらお互い意気投合したから話を進めたことにしてほしい」

「でも、フランス語ができる程度のことなら、楓さんの周囲にはたくさんいます。私の疑問に、楓さんは肩を竦めてみせた。」

「確かに、何人かはいた。が、俺の好みじゃなかった」

「好みですか……」

「そこ、重要なんだ……？ まあ、結婚するなら大切なことだけど、契約ならどうでもいい気がする。」

「仕事の上での好みだ。彼女たちの背後にある親や親戚関係が面倒だった。その点、君の実家は問題ない」

「眞宮不動産はそこそこの規模で関東を中心にいくつか支店もあるけれど、一ノ瀬グループとは比較にならない。それが、彼の希望にはちょうどよかったんだろうか。」

「お金で黙ってくれないお家柄の方々だったということですか？」

「いや、むしろもっとよこせと言われかねなかった」

「それは確かに困るだろう。だけど、私との契約で負債十億円プラス今後の運転資金を支援してくれる楓さんが辟易する金額って、一体いくらなのか。」

「そういうわけで、金で動いてくれて、且つ理不尽な要求をしそうにない家の娘となると、かなり絞られていた。その中で、フランス語が堪能で英語とスペイン語もできるのは君だけだった」

「そんな事情で私が選ばれたのか。語学を勉強しておいてよかった。そう思うくらい、この契約は私には願ってもないものだ。」

「それで、今後の流れだが」

「はい」

「今日の時点で、俺も君もお互いを気に入って、結婚前提の交際を開始。二、三ヶ月、デートでもして仲を深め、その後婚姻届提出を予定している」

「わかりました」

「私が頷くと、楓さんは指を顎に当てて少し思案した。」

「結婚式は」

「私は興味がないのでお任せします」

「わかった。一ヶ月で結婚を決めて、そこから挙式の準備に入ったことにする」

「そんなに簡単に進むものだろうか。私はともかく、楓さんは一ノ瀬グループの御曹司だ。そんな人の結婚式となると、相応の準備が必要になるのでは。」

「交際開始から一ヶ月でプロポーズという設定で結婚式の準備をする。式場はうちのプライベート部門に任せるし、招待客は……少し慌ただしくなるが、欠席でも問題ない」

「むしろ欠席してほしいように聞こえるんですが。」

「今日から一ヶ月交際して結婚を決め、そこから二ヶ月かけて挙式の準備……という流れでいいのかな。」

「私の確認に、楓さんは頷いた。」

「女性の方が支度は大変だろうから、君には苦勞をかけるが」

「契約の一環ということでお受けします」

「すまないな」

少しだけ申し訳なさそうに言う楓さんに、私は苦笑した。私の方こそ申し訳ない事情がたくさんあるんだから、謝らなくてもいいのに。意外に律儀な人なのかもしれない。

「結婚式の費用ですが」

「それは俺が出す。結納も交わすつもりだ。少なくとも、金銭面では君に負担はかけない」
「ありがとうございます。お言葉に甘えます」

私も少しは貯金があるけれど、楓さんが考えている挙式費用には絶対に足りない。半額どころか一割に届くかも怪しい。婚約指輪のお返しは、気持ち程度になりそうだ。

「今日はここまでしておくか。次は君の都合に合わせる。いつがいい？」

「土日祝日でしたら大丈夫です」

「なら、次の土曜日、十時にこのホテルのラウンジで」

「わかりました」

——こうして、私と彼の結婚は仮契約された。

帰宅した私は、和室に入って振袖を脱いだ。代わりに、飾り気のないひよこ色のルームウェアに袖を通すと、いかに着物が体を締めていたかわかる。

すぐにクリーニングに出せるよう振袖や和風下着を片づけていたら、姉が声をかけてきた。

「桃香ちゃん、パパとママが呼んでる。リビングに来て」

「はい」

お見合いの結果について聞きたいのだろう。どう答えるかは私に一任されているし、答えの方向性も決まっている。

立ち上がった私は和室の障子ガラスを開け、そこに立っていた姉を見て絶句した。

「お姉ちゃん……?」

姉は大きな目に涙を溜めていたのだ。涙もろい性格なのは知っているけれど、今は何を嘆いているのかわからない。

「ごめんなさい……私がお見合い結婚は嫌だって言ったから、そのせいで桃香ちゃんに……」

「今日のお見合いは私を名指ししたから、お姉ちゃんの代わりじゃないでしょ」

「うん……でも……」

二つ年上の姉は、大学卒業後は跡取りとして父の会社で働いている。それもあってか、典型的な箱入りお嬢さまで世間に疎い。

「私は気にしていないから、お姉ちゃんも気にしないで。お父さんたちが呼んでるんで

しょ？ 早く行かなきゃ」

「……うん」

涙を拭って、姉が頷く。そんな姉を宥めながら、私は両親の待つリビングへ向かった。コンコンコンと扉をノックし、返事を待たずに室内に入る。吹き抜けの広いリビングは開放感はあるが、プライバシーはない。

ソファに座った父と母に促され、私と姉もそれぞれの定位置に腰を下ろした。

「桃香。今日の見合いは……」

「いい人だった。結婚を前提にお話を進めたいって言われたから、お受けしてきた。来週、デートの予定」

私の答えに父が黙り、母が身を乗り出してきた。

「あちら、一ノ瀬グループの御曹司でしょう？ あなたのどこをそんなに気に入ったの」

母は、いつものことだが娘に容赦がない。

「桃香ちゃんは可愛いでしょ!？」

私の代わりに姉が抗議すると、母は溜息をついた。

「確かに顔は可愛い方だとは思うけれど、情緒がね……それに、身内最良というものがあるじゃない。あちらは誰が見ても綺麗な方だし」

「何故か、気に入ってくれたみたい。もちろん、この先破談になるかもしれないけど、

少なくとも今のところは結婚前提」

まだ、負債の肩代わりやその他の資金援助については話さないことにした。あんな超一流グループの御曹司が、会ったその日にそこまでするほどの魅力は、私にはない。

「桃香。もし、会社のことでも無理しているなら……」

言いかけて、父はもどかしそうに口ごもる。私は、父を安心させる為に笑ってみせた。「してない。話してみたら思ったより気さくな人だったし、結婚してもいいかなって思ったの。あちらもそう。まだ、結婚するかもっていうだけで、決めたわけじゃないし。だからデートして、お互いの気持ちを確認めるの」

「本当に、無理はしていないんだな？」

「会社の為に好きでもない人と結婚しないのよ、桃香」

両親も姉も、私を心配してくれる。嘘をつくのは心苦しいけれど、私は「身内への表情は百面相なのに、情緒が死んでいるから本心はわかりづらい」そうで、この時も複雑な心情は顔に出ることはなかった。ちなみに他人に対しては殆ど無表情らしいので、情緒面を心配されるのは仕方ないと思っている。

「大丈夫。それよりも本当に結婚になったら、お姉ちゃんより先にお嫁に行くことになるけど、いいかな？」

「そんなの気にしない。でも、桃香ちゃん……」

本当に嫌じゃないの？ そう不安げに問う姉は、とても過保護だ。

「もう、お父さんもお母さんもお姉ちゃんも！ 楓さんに失礼だよ」

わざと拗ねたように言ってみせると、両親と姉はやつと安心したのか、全身から緊張が解けた。その空気がまた「心配」に変わる前に、私は外出することにした。

「お着物、クリーニングに出してくるね。帰りにコンビニに寄るけど、何かいる？」

「父さんはいい」

「お母さんも特にないわ」

「私、チョコレート」

「わかった。ナッツのチョコね？」

姉の好きな種類を確認し、私は手を振りながら部屋を出た。

——めちやくちや焦った……！

廊下に出た瞬間、笑顔を貼りつけていた顔が強張る。無理はしていないけれど、会社の為に結婚する気ではないかと言われた時は、ちよつと心臓が跳ねた。

今後は、私の演技力が試されることが増えそうだ。本音を表情に出さない、尚且つ不自然に思われぬ演技。私は感情の機微に疎いけれど、家族には百面相らしいから気をつけなと。

そう思いながら和室に向かい、畳紙に包んだ着物や長襦袢などの小物を紙袋に入れた。

翌週、私は勤務先でのランチを早めに終え、昼休みに就業規則を読んだ。楓さんとは仕事について詳しく話していないものの、確か私を第二秘書にするという話だった。今の仕事は退職してほしい、みたいなことも言われたし。

退職の規定を読むと、退職一ヶ月前までに上司に報告、有休消化も認めると書いてあってほつとした。

今週末、楓さんに会ったら退職のタイミングも相談しなくては。私は脳内のTODORISTに記録して、就業規則のページを閉じる。

今の仕事——中堅の貿易会社の海外営業事務は自力で就活して選んだから、辞めるのは惜しい。でもこのままでは十億円以上の負債分を稼げるはずもないので、この点は楓さんの意見を通すしかない。

私は、取引先や仲介会社から届いていた未読のメールを確認し、フランス語を英語や日本語に翻訳して一日の勤務を終える。

定時で終われたので、通勤ラッシュに巻き込まれることを覚悟して駅に向かう。その途中、バッグの中のスマホがブーンと鳴った。

道の端に寄ってスマホを見たら、昨日連絡先を交換したばかりの楓さんからのメッセージ着信だった。そのままメッセージを開くと、デートという名の打ち合わせについ

ての連絡だ。

「――服装はドレスコードに違反しない程度で、ですか……」

思わず溜息をついた。つまり、ドレスコードがあるお店での食事ということだ。そういった作法は幼少期から身につけさせられてはいるけれど、ほぼ初対面の男性と二人で食事というのはあまり楽しくない。

……返事は、帰ってからにしよう。既読はついてしまったけど、即返信しろなんてことはおそらく言われないだろう。言われたら、できない場合もあると主張すればいいだけだし。

負債の肩代わりという点で多大な恩を受ける予定ではあるものの、楓さんも必要に迫られての契約結婚だ。対等かどうかはわからないけど、私は卑屈になるつもりはない。手帳タイプのスマホケースをぱたんと閉じ、私は足早に駅へと急いだ。

四月とはいえ、夜は冷える。桜は満開なので、これは花冷えというものだろうか。

父と姉は残業だったので、母と二人の夕食を終える。その後は少し長めに入浴し、部屋に戻ってドライヤーで髪を乾かした。胸元まである髪の毛先が傷まないよう、ヘアトリートメントを付けておく。

その時になって、私は楓さんへの返事がまだだったことに気がついた。時計を見たら

二十時。今から返信しても失礼な時間ではない。

「わかりました。ワンピースで行きます。――送信、と」

オフホワイトのチュール生地にピンクベージュのレースと刺繍をあしらった、ロング丈のワンピースは、この春買ったばかりで一度も着ていない。それにシルバーのレースパンプスなら、お食事には問題ない……と思う。

ただ、そういうファッションだとバッグは小さめにしなくてはいけない。契約の打ち合わせにタブレットを持ち込みたかったけれど、USBにするしかなさそうだ。

クローゼットの中を眺めてそう考えていたら、メッセージアプリの着信音が鳴る。

『食事の好みは？』

素っ気ない問いかけに、私も端的に返信した。

『好き嫌いもアレルギーもありません』

少しして、更に返信が届く。

『フランス料理を予約しておく』

了解です、とスタンプを送って、私はベッドに寝転んだ。

私が望んだ契約結婚。それを知らない家族の疑念はなかなか解けない。誤魔化し続けるのも気詰まりなので、いっそのこと早く結婚したいと言ったら、楓さんはどんな反応をするだろう。

「まずは退職の相談からだけど」
 眩いた後、私は体を起こしてスマホを取り、秘書の仕事について検索した。何冊かお
 勧めの書籍も紹介されていたので、購入する。
 ——こういうところが生真面目で融通が利かないって言われるんだけど、性分だも
 のね。

私はスマホをテーブルの上に置いて、今度こそ眠る為にベッドに潜り込んだ。

先日お見合いしたホテルまでタクシーに乗り、料金を支払ったタイミングでドアマン
 がさりげなく近づいてくる。待ち合わせですと告げると、既に楓さんは到着しているら
 しく、その席まで案内される。

お見合いの時と違うのは、その席がどちらかという入り口に近いこと、それから楓
 さんのスーツが少しカジュアルにドレスダウンしていることだ。プルシアンブルーのス
 リーピースーツにベビーピンクのシャツ、ネクタイは深いローズマダー色で、桜の花
 型のラペルピンが綺麗だった。

男性が着こなすのは難しそうな華のある組み合わせだけど、彼の為だけに詭あやまえたよう

に似合っている。それに、私のワンピースとは図らずしもリンクコーデになってしまった。
 私に気づいて、楓さんが手を挙げる。その向かいに座ると、すぐにウェイターが来た
 ので、アイステイーを注文した。

「どこか行きたい場所はある？」

さほど興味なげに訊かれ、私は首を横に振った。

「いいえ、特にありません」

「そうか。——反応しないで聞いてほしいんだが」

「はい？」

「このラウンジに一組、うちの両親が手配した興信所の人間がいる」

何気ない口調で言われた内容に、飲み物を口にしていなくてよかつたと思う。思わず
 咽むせるところだった。

「君との見合いの後、すぐに話を進めたいと言ったのを不審がついているみたいだな」

「私も疑われましたけど……さすがに興信所はつけられてませんよ？」

「俺も、好ましく思ったとしか言ってない。残念ながら、両親の信用は得られていない
 らしい」

楓さんが淡々と告げた直後、私の前にアイステイーが置かれた。ミルクだけ入れてス
 トローを差し、一口飲んで気持ち落ち着かせる。

「それで……?」
 「楽しみに会話しているのを見せるか、デートの様子を見張らせれば納得するだろう。今日は契約の細部を打ち合わせしたかったが、初回のデートでホテルの部屋に入るの君の印象を悪くする」

「でしょうね」

私はその意見に頷いた。身持ちの悪い女だと思われては困る。この先、二十年か三十年は楓さんの妻として生きるのだから、ご両親に悪印象は持たれたくない。

「買い物にでも行くか」

「何をかうんです? 初回から男性にプレゼントしてもらう女というのも、あまりいいイメージはありませんが」

「それもそうか」

楓さんも納得したが、そうなると本当に行き先が決まらない。私はアイステイーを、楓さんはコーヒーを堪能しながら、お互いしばらく無言で考える。

映画は、興信所の人たちに見張らせるのが難しいから却下。遊園地も、今日の私たちはそんなカジュアルなファッションではない。

会話が少ななくて、でもそこそこ楽しそうに見える場所……水族館? それとも美術館?

「水族館か美術館でどうでしょう」

「水族館は行ったことがない」

「楓さんが興味ないなら、美術館でもいいですよ。会話しなくていいですし。楽しそうに笑う演技くらいは私にもできます」

私が答えると、楓さんはスマホを取り出して何か検索し始めた。都内の美術館の展示内容を調べているらしい。

「今なら、至高のジュエリー展というのが人気らしい」

「私は興味ありませんが、女性人気は高そうですね」

「そこは妥協してくれ。刀剣展示もあるが……日本刀ならうちにも何本かあるしな。俺がわざわざ観に行くほどの関心がないことは、親は知っている」

それはつまり、一ノ瀬家は国宝レベルの刀剣を個人所有しているということだろうか。しかも複数。

「水族館……か」

そう呟いた楓さんの表情が、少しだけやわらかくなっていることに気づいた。やわらかいというか、わくわくしているように見える。

これは——もしかしなくても、水族館に行きたいのではないだろうか。

「……楓さん。水族館に行ってみたいんですか?」

私の言葉に、楓さんは一瞬にして無表情になった。凶星だったらしい。意外とわかりやすい人なのかもしれない。ちょっと可愛いと思ってしまった。

「水族館に行きましょう。大丈夫です、楽しい会話でなくても笑顔をキープしますから」私はハイジュエリーには興味がないし、水族館も久しぶりだ。どちらでもいいので、楓さんの行きたい方に合わせることにした。私も楓さんも、水族館デートにしては少し浮きそうなファッションだけど、そこは仕方ない。

「ありがとう」

小さく笑いながら礼を言って、楓さんが立ち上がる。途端、ラウンジ内の女性たちが静かにざわめいた。

「あ、私、払います」

「このくらいは奢らせてくれないか」

そう言われたら、食い下がることもできない。だけど、夕食だけは絶対に割り勘にしてみらおうと心に誓う。

「それから、桃香さん」

「はい？」

「その服、君に似合っている」

さらっと言って、楓さんは伝票を持ってレセプションに向かった。……褒められ慣れ

ていない私の頬が熱くなったのは、仕方ないと思う。何というか、女性の扱いが自然体でスマートな人なんだなと感心した。

どうせ水族館に行くなら、行ってみたいところがあったのでそこをお願いしてみた。水族館未体験の楓さんにとってはどこでもいいらしく、すんなりOKしてくれる。

タクシーに乗って目的地に着いた後、楓さんがチケットを買ってくれた。自然に会計しているから、私はお財布を出すタイミングを失ってしまう。

「……奢られてばかりです」

私たちは恋愛関係じゃないから、奢られるのは気が引ける。いや、恋愛関係だとしても奢られっ放しというのは、私は嫌だ。まして、私と楓さんは契約結婚する「取引相手」だ。奢られる道理はないと思う。

そう思って不満を口にする、楓さんが小さく首を傾げる。

「デートは男が払うものじゃないのか？」

「そういう場合もあるとは思いますが、私は自分の分は払いたいです」

私の答えに、楓さんは頷いた。

「わかった。なら、中のカフェでは個別に払おう」

妥協したように言われたけれど、私が気になってしまうのは夕食の方だ。

「デイナーは俺に格好をつけさせてほしい」

先手を打たれてしまった。でも、万単位——ワインを入れたら十万単位のお食事をご馳走になるのは気が引ける。

そう思っていると、楓さんは諭すように言葉を重ねた。

「俺にも世間体というものがある」

「世間体？」

「馴染みの店を予約したから。——女性と一緒になのに支払いが別というのは、少し困るんだ」

楓さんが「馴染み」というほどのお店なら、従業員教育はしっかりしているだろうから、空気を読んでくれると思うんだけど。

でも、そういう懸念はわからなくてもない。一応、私の意見も提案してみた。

「じゃあ、お店を出た後で精算するというのは？」

「それはそれで気が進まない。君の厚意だけ受け取っておく」

そんな会話を、私たちは興信所の調査員にどう見られるか意識し、微笑みを貼りつけてこなしている。楓さんがチケットを渡しながら少し身を屈め、私の耳元に唇を寄せた。

「——俺の後ろ、黒のシャツにジーンズの男と、花柄のプリントドレスの女。それが興信所」

声を潜めた囁きは、ぞくぞくとするほど甘く響いた。楓さんは顔立ちだけでなく骨格も綺麗なので、声も良い。その艶やかな声に、彼は男の人なんだと強く意識させられた。

「わ、かりました」

思わず返答に詰まった私を不思議そうに見つめて、楓さんが離れる。そこそこの人混みの中から目立たなかったとは思っけれど、綺麗すぎる顔のアップと色気のある声のダブルパンチは心臓が悪い。

「は、入りましょう」

やや挙動不審な自分に気づかれないよう、私は楓さんに先を促した。

春ということで、水族館内は桜をテーマにした演出がされているらしい。

舞い散る桜吹雪や満開の桜を、彩り豊かなグラデーションで演出した空間。そこに配置された透明な円柱型の水槽の中で、煌めく光にライトアップされた魚たちはとても美しかった。写真を撮っている人たちもいる。私は記録ではなく記憶するタイプなので、とにかく観賞した。

「綺麗ですね」

「そうだな。クラゲがこんなに綺麗だとは思わなかった」

微笑む楓さんの横顔も綺麗だ。幻想的な空間を抜けて先に進むと、今度は海中トンネ

ルのような場所に出る。

「わあ……」

水の中にいるような不思議な感覚に囚われ、私は思わず見惚れていた。その時、隣にいたカップルの女性にぶつかりそうになってしまっ。

「危ない」

瞬間、少しだけ強く楓さんに抱き寄せられる。すんでのところで、衝突を避けることができた。相手の女性と謝罪の会釈をし合って、私は楓さんの胸元から離れた。

「すみません……」

「いや。俺こそ、乱暴に扱ってしまった」

謝罪したら逆に反省されてしまったので、私は表現を変えた。

「助けてくれて、ありがとうございます」

「……ああ」

今度は、楓さんも少し微笑んだ。気遣いで返してくれる人は、いい人だと思う。

「手を繋ぐか」

「そこまで子どもじゃありません」

「さっきの二人は腕を組んでいたから。俺たちも、デートらしく見えるように」

そう言って差し出された楓さんの手に、私は躊躇いながら指を絡めた。私の手を包み

込むくらい大きな手は、爪の形まで綺麗だった。

私たちが海中トンネルのような通路を抜けた頃には、周りの人も少し減った。もっとゆつくり堪能するものなのかもしれないけれど、私は繋いだ手が恥ずかしくてそんな余裕がない。

「イルカのショーがあるみたいだ」

見ていくか？ と問われ、頷く。少なくとも、座ったら繋いだ手は離されるはずだ。

プールを囲む観客席にはまだ余裕があったので、真ん中くらいの場所に並んで座る。

休日なのにスーツ姿の楓さん、フォーマルなワンピースの私は、周囲からはやはり少し浮いていた。

「私たち、浮いてますね」

「そうか？」

いつもこんな感じだと言って、楓さんはステージになるプールを眺めている。この浮世離れた綺麗な人は、周囲の視線が気にならないらしい。若い女性連れが何組もこちらをチラチラ見ているのに。

「イルカだけじゃなく、ペンギンもショーをするのか」

プールサイドにペンギンの群れが現れたのを見て、楓さんは感嘆したように呟く。本当に水族館に来るのが初めてなんだなあと思うけれど、私もそんなに詳しいわけではない。

ない。

飼育員の女性が現れ、挨拶した後でショーが始まった。ここにも桜の映像が投影され、光と音で更に華やかになっている。

プールの中の女性に指示され、舞うように高くジャンプするイルカ。彼女の手から餌を食べ、もつととねだるペンギン。器用なその様子に、私はずつと拍手していた。隣を見ると、楓さんも楽しそうだ。

「——そろそろ終わりか？」

ショーが終盤になった時、腕時計を見て楓さんは私の肩に軽く触れた。

「出よう。カフェが混みそうだ」

「はい」

可愛いイルカが名残惜しくて振り返りながら通路に戻っていると、楓さんがくすつと笑った。

「イルカのぬいぐるみなら、買わせてもらおうが」

「……自分で買います」

顔を合わせたのは今日で二回目。なのに、私たちはそんな軽口が叩ける程度に打ち解けていた。

水族館の中のカフェは、海をイメージした水槽があり、深い青と白い壁のコントラス

トが綺麗な空間だ。私は座り心地のいいソファ側を勧められ、楓さんが向かいの椅子に腰を下ろす。

時間的にお昼を食べてもいいのだけれど、私は夕食が「デイナー」になる場合は、昼食を抜くようにしている。でないと、コースの最後まで入らなくて、お店に失礼になってしまう。

だから軽くパンケーキと桜のアイスラテにしておく。楓さんはラテアートが気になったらしく、カフェラテとクラブハウスサンドイッチを選んだ。

少し待って、運ばれてきた料理をそれぞれ口にする。店内の雰囲気からしてお洒落な見た目優先かと思っていたけれど、かなりおいしい。

「あの、相談しておきたいことがあるんです」

「今？」

「早い方がいいんですが……ここだと内密にはいきませんね」

「例のことに関わる内容なら、夕食の時に聞く。個室だから」

楓さんの答えに、私はほっとして頷いた。退職についての相談は、週明けには上司に相談できるよう、今日のうちに済ませたい。

そんな私に、楓さんが少し困った顔で問いかけてきた。アーモンド形の綺麗な目は、手元のマグカップを見つめている。

「……これは、どうやって飲めばいい？」

「ラテアートですよ。私は一通り見たらそのまま飲みます」

「そのまま？　そういう作法なのか？」

「作法ではないと思いますが、眺めてても冷めますし」

私は情緒に無頓着なので、ラテアートも「可愛い」と眺めた後はおいしくいただくことを優先する。でも、楓さんはラテアートを目にするのは今回が初めてらしいし、ココアパウダーで描かれているイルカは確かに可愛い。

「スマホで撮影して、後で見返すのはどうですか？」

「そうする」

おそらく一般的なだろう方法を提案すると、楓さんはスマホを取り出してパシャリと無造作に撮影した。SNS映えは気にしないらしい。まあ、そもそもSNSはやっていないだろう。

私は、桜のラテにストローを差した。鮮やかなピンクのラテは、苺の味と桜の香りが程よくミックスされていておいしい。

「この後は、どうする？」

楓さんは、ちらりと背後に視線を向けた。その先に、入り口で見た興信所の男女がいる。「夕食の予約は何時ですか？」

「十八時」

私から自分の腕時計を見ると、十三時を過ぎたばかりだった。あと五時間もある。

「なら、買い物に付き合っていたら」

「欲しいものがあるのか？」

「羽織るものを忘れたので、ストールか上着を買いたくて」

十八時からデイナーなら、家に帰るのは二十一時を過ぎる。春とはいえ、袖丈の短いワンピース一枚では少し肌寒い。

「それは、俺が払うのは……」

「駄目です。私の私物ですから」

初回のデートでデイナーをご馳走にならざるを得ないのに、服まで買っていたくわけにはいかない。

「お店の格式はどのくらいですか？」

「君のその服で問題ないと思う」

「わかりました。買い直す覚悟もしていたので、よかったです」

お店は空調が整えられていると思うけれど、温度設定はスーツの男性に合わせている可能性がある。脱いでしまうとコートよりはポレロがいいかもしれない。

「……服を一枚買うのに、五時間かかるのか？」

「そこまで時間はかけませんが」
ちよつと引いた感じで質問され、私は苦笑した。ウインドウショッピングでもないし、買う物が決まっているから、そんなに時間はかからないと思う。

ただ、そうなるとう十八時までの時間潰しに困るのである。そのことを察したらしい楓さんが、僅かに首を傾げた。可愛らしい仕種なのに、艶やかに映るのは何故だろう。

「この後、買い物をしてから行けそうなところとなると……」

「どうせなら美術館にも行きますか？ 至高のジュエリー展」

「いいのか？ 俺と行ったら買わされるぞ」

宝石展というものは、展示するだけでなく販売も兼ねている時がある。

たぶん私は渋い顔をしたのだろう、楓さんが笑う。面白い玩具を見つけた子どもみたいな笑い方で、綺麗だけど可愛い。美形は得だなあ。

「婚約指輪用の石を選んでもいいが」

「早すぎます。疑われます」

「結婚前提のデートだから、早すぎるということもないんだがな」

「まだ、結婚を決めたわけではない設定です」

私たちは声を潜めて——二つ後ろの席に座っている男女に聞こえないよう会話をした。私はスマホを手にとって色々な展示会を検索し、そして悲鳴を呑み込んだ。

立ち読みサンプル はここまで

何故、これを見落としていたのか。できることなら、大学院に進んで研究したいとさえ思っていたものなのに。私が院に進まなかったのは、代わりに留学させてもらったからである。

「楓さん。行きましょう。服はさっさと買いますから、急ぎましょう」

「どうした？」

「フランス古典文学の展示があるんです。規模はとっても小さいですけど！」

百貨店の催事場という限られたスペースで、フランス古典文学をテーマにして絵画や原本の展示が開催されていた。たぶん、絵画の販売がメインで原本展示は僅かだと思われるけど、どうしても観ておきたい。

私の静かな熱意に圧されたのか、楓さんがOKしてくれたので、私たちはカフェを出て売店に行った。そこで大きなイルカのぬいぐるみを買って発送手続きをした後、フランス古典文学展示会が行われている百貨店に向かった。服は、そのレディースフロアで買えばいい。

レディースフロアに着くなり、私は目についたセレクトショップに入った。すぐに店員の女性が近づいてきてくれたので、今日のワンピースに合わせた上着が欲しいと相談した。ちなみに楓さんは、私の隣で興味なさげに立っている。